

科研費プロジェクト・シンポジウム

スラヴ文化の森

環境批評の視点から

開催日時

2023年9月30日(土)
15:00 - 18:30

講演者(五十音順)

阿部賢一(東京大学)
越野剛(慶応義塾大学)
菅原祥(京都産業大学)
松前もゆる(早稲田大学)

コメンテーター

中村唯史(京都大学)
森岡卓司(山形大学)

プロジェクト趣旨説明・司会
小椋彩(北海道大学)

会場: 北海道大学
文学部人文・社会科学総合教育研究棟 2階 (W202)

主催: 科研費基盤研究(B)
「ロシア・中東欧のエコクリティシズム:
スラヴ文学と環境問題の諸相」(21H00518)

共催: 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
北海道大学大学院文学研究院 北方研究教育センター

問い合わせ先: 小椋彩 (hikaru-o@let.hokudai.ac.jp)

アクセスマップ



※駐車場はありません。公共交通機関でお越し下さい。

阿部賢一

「シュマヴァ」と「バーマーヴァルト」の同一性と差異——「ボヘミアの森」の表象」

南ボヘミア出身のドイツ語作家アーダルベルト・シュティフター(Adalbert Stifter,1805-1868)と、主にチェコ語で執筆したカレル・クロステルマン(Karel Klostermann,1848-1923)。ともに、チェコ、オーストリアに跨る森林地帯(チェコ語でŠumava、ドイツ語でBöhmerwald)を知悉し、その地の様相を多面的に描いたことで知られる。前者はオーストリアの作家、後者はチェコの作家としてそれぞれの文学史において位置を占めているが、両者に共通するのはボヘミアの森に対する強い関心である。本報告では、それぞれのドイツ語、チェコ語の作品における「ボヘミアの森」の記述を検討し、「森」の表象が言語によってどのように変化しているのか、検討を行う。

越野剛

「ソ連時代ベラルーシの原生林とバイソンのイメージ」

ベラルーシ西部のプレスト州とポーランド東部のポドラシェ県の国境をまたぐベラヴェジャの森(ポーランド語はピャウォヴィエジャ)はヨーロッパ太古の原生林の面影を残す貴重な空間としてよく知られている。とりわけ森に棲むヨーロッパ・バイソンは絶滅の危機を乗り越えて種の保存に成功したという経緯から、ベラルーシの民族復興のシンボルとして用いられる傾向がある。ここでは「リトアニア」のラテン語詩人ニコラス・フツソウィアヌスの「バイソンの歌」(1523年)の現代ベラルーシ語訳(1973年)、およびソ連時代の作家ウラジーミル・カラトケーヴィチのエッセイ『白い翼の下の大地』(1972年)、『ベラヴェジャの森』(1975年)における森と野生動物のイメージを分析することにより、環境批評的な観点を交えながらベラルーシ文化におけるベラヴェジャの森の位置づけを明らかにする。

菅原祥

「死者の声を聴く場所としての「森」——現代ポーランド文学の事例から——」

本報告では、大量虐殺や住民追放によって生じた死者・犠牲者の「声」に満ちた場所としての「森」と、そこにおいて死者の声を「聴く」ことを可能にするような実践に着目し、現代ポーランド文学におけるいくつかの事例を紹介する。具体的には、バスキド・ニスキ山脈からのレムコ人の強制移住を扱ったモニカ・シュナイデルマンのノンフィクション作品『からっぽの森』(2019)や、下シロンスク地域のかつてのドイツ人住民の記憶に言及したオルガ・トカルチュクの小説『昼の家、夜の家』(1998)および『死者の骨の上で犁を引け』(2009)等を検討する。

松前もゆる

「ブルガリアの森をめぐる人びとの語りに関する試論」

ブルガリアの民間信仰に関する著作の中でディミタル・マリノフは、森を、大地や水、火とともに人間が生きていくためになくてはならないが、同時に、そこは野生動物や妖精、あるいは怪物のような存在に満ちた場所であり、人や家畜の暮らすところではないとされていると述べた。ここからは、森を非人間の世界(自然)とし、人間世界(文化)と対比的に捉えることが可能かもしれないが、実際には森は、とくに村落部に暮らす人びとが日常的に歩き、そこから薪や木材のほか、キノコや果物、ハーブを手に入れたり、狩りをしたりする場所でもある。本発表では、人間／非人間や自然／文化といった二元論を問い直そうとする近年の文化人類学における動きを視野に入れながら、森に関わる民話や森をめぐる人びとの語りから、森と人間との関係性について再検討を試みる。